TV 報道検証【報道特集】　報告書

テレビ局： TBS	番組名：報道特集	放送日： 2018 年 8 月 18 日

出演者：金平茂紀、日下部正樹、膳場貴子、日比麻音子
ゲスト：金氏裕之(ディレクター、サハリンの語り部を取材)

検証テーマ： オープニング、アジア大会と南北合同チーム
【特集】翁長氏死去で前倒し沖縄県知事選挙の行方、【特集】サハリンの語り部を目指して

報道トピック一覧

・兵庫県加古川市のダムで衣装ケース入り女性痛い、死体遺棄用語で男二人を逮捕
・新潟県十日町市、林道女性遺体発見事件、不明の知人男性とみられる遺体が発見される
・15 年前に大阪府枚方で行方不明になった男性殺害容疑で 4 人逮捕
・横浜市、連続点滴中毒死事件で元看護師を再逮捕
・大阪府の逃走男、弁護士に対して「接見終了は自分で伝える」と話していたことが明らかに
・北海道伊達市、乗用車とワゴン車が正面衝突、二人死亡一人重体
・岐阜県飛騨川バス転落事故から今日で 50 年
・熊本県益城町、災害公営住宅の抽選
・岡山県倉敷市、豪雨被災の児童が別の学校を見学
・愛媛県松山市で俳句甲子園開幕
・アジア大会と南北合同チーム
・横浜市で車 14 台に液体、塗装に被害
・横浜市瀬谷区、交差点で大型トレーラーが横転
・千葉県鴨川市の漁港で流された男性三人を救助
・シカゴから成田空港に向かう航空機内で別の乗客に放尿したアメリカ国籍男性を逮捕
・【特集】翁長氏死去で前倒し沖縄県知事選挙の行方
・【特集】サハリンの語り部を目指して
・スポーツ報道

放送法第 4 条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨

・オープニング：結論→特に問題なし

番組の冒頭で金平キャスターが「自らに批判的なメディアに向かってフェイクニュースなどと執拗に言って攻撃するトランプ大統領に対してアメリカの 350 をこす新聞が報道の自由を訴える社説を一斉に掲げました。このニュース私達の国にとって果たしてよそ事でしょうか。」と述べていた。このコメントに当てられた時間は 16 秒だった。なお、トランプ大統領とメディアの対立についてはこの箇所以外では今回の放送では触れられていなかった。放送法の観点からは特に問題はなかった。

・アジア大会と南北合同チーム：結論→特に問題なし

インドネシアの首都ジャカルタでは今夜アジア大会の開会式が行われること、アジア大会の盛り上げも狙ってかインドネシア政府が韓国のムン・ジェイン大統領と北朝鮮の金正恩党委員長を積極的に招待していたこと、今年 4 月の板門店宣言にはアジア大会への南北合同での参加を明記し先月平壌で南北のバスケチームが親善試合を行った他、韓国で合同練習を行うなどしてアジア大会にのぞんだこと、両首脳は大会には来なかったが韓国と北

朝鮮は開会式を前にひと足先に始まった女子バスケットボールで合同チームを結成し応援団も南北一緒になって声援を送っていること、応援に使われている朝鮮半島が描かれた統一旗について南北双方が竹島を記載することをアジアオリンピック評議会に求めていたが認められなかったとのこと、今夜開かれる開会式では合同チームがその統一旗を持って一緒に更新することになっていることが伝えられた。このトピックに当てられた時間は 113 秒で、放送法の観点からは特に問題は見られなかった。

・【特集】翁長氏死去で前倒し沖縄県知事選挙の行方：結論→特に問題なし

翁長氏の死去を承けて前倒しで行われることとなった沖縄県知事選挙について自民党県連が擁立する佐喜眞淳氏が立候補表明したこと、オール沖縄陣営でははは翁長県政を支えた謝花喜一郎副知事や沖縄経済界重鎮で金秀グループの呉屋守将会長などの名前が挙がっている一方で立候補が取りざたされていた城間幹子那覇市長は出馬しない考えを表明しており候補者が未だ決まっていないこと、それぞれの陣営から見た翁長氏についてなどが VTR で取り上げられていた。またスタジオでは自民党側は宜野湾市長を務めた佐喜眞淳氏を全面的に支援する方針だが沖縄コンベンションビューロー元会長の安里繁信氏も出馬表明をしていて一本化に向けて最終的な調整を続けている、とのことが伝えられた。

また、翁長県政や基地問題を振り返る場面や、佐喜眞淳氏を擁立した照屋守之県議の「私共、自由民主党県連のリーダーの先輩として沖縄の政治を造ってきているという風に言っておりまして思い出は募りましたけれども、オール沖縄というのはですね、個人的には選挙で勝つための手段だという風にとらえております。政策を実現するためにはオール沖縄というその政治勢力は役に立っていないなーというのがこれまで 4 か年間をふりかえってみてですねそのような理解をしております。」というコメントや、城間幹子那覇市長「政治一筋で来た翁長丈志さんを私はみてきましたし、彼の様々な沖縄に対する思いの言葉、イデオロギーよりアイデンティティーとまさにその通りで、議場でも腹八分、腹六分でお互いに保革を超えてやらないと沖縄のこの問題は解決できないんだという言葉を目の当たりにしてきました。翁長さんの死去によって結束は固くなっていくだろうと。まずは遺志を継がなきゃいけないってことで。ただその羅針盤を失った船のようなものですので今、漂っている状態なのかもしれません。今。」というコメントが取り上げられていた。

また、スタジオでは以下に朱記したやり取りが繰り広げられた。

膳場「沖縄県知事選の構図ですけれども、翁長知事を支えてきたオール沖縄側の候補者は現時点では決まっていません。一方自民党側は宜野湾市長を務めた佐喜眞淳氏を全面的に支援する方針です。ただ沖縄コンベンションビューロー元会長の安里繁信氏も出馬表明をしていて一本化に向けて最終的な調整を続けています。金平さんは先週、今週と沖縄を取材していて翁長さんを亡くした沖縄の今の空気っていうのはどのようなものなんでしょうか？」

金平「あのー翁長さんが息を引き取った直後ですね、僕は浦添総合病院というところに駆け付けたんですけども、まあ突然訪れた死ということでですね沖縄の人々はですね深い悲しみとこう喪失感というのかな今も続いているというのが現状ですね。これ翌日の、亡くなった翌日の地元の新聞ですけどね、こういう風に大きく、まあ記事の中身も新聞の中身もほとんど翁長さんの死亡についての内容の記事が出ているということなんですけど、まさに命を削って沖縄の基地の過剰負担という理不尽に対して政府に抗いながらねえー、姿勢を貫いたっていうまあそこをですね立場の違いを超えて沖縄県民はみていたっていうことの重みっていうのを感じましたですね。でっ奥様にお話しをお聞きしましたんですけども、最後に公の場に姿を現れた 7 月の 22 日の記者会見、あれをやる前にですね 3 メートル進んでは止まり、3 メートル進んでは止まりっていうの、そういう状況だったっていうことにまさにあの会見が遺言のような形になったんですね。」

日下部「金平さんがおっしゃった命を削ってですね翁長さんが訴えてきたもの、問いかけてきたこと、それは沖縄の人だけではなくてですね本土の私たちもですねしっかりと見つめなおす必要があるな感じたんですけれども」

金平「翁長さんもともとあの一自民党の県連の幹事長をやっていたもう保守の人ですよね。その人が長い間、本土政府との付き合いの中であえて言えばこう蔑むとかねあるいはいじめに近いような態度をずっと取り続けた来たことに対して、非常に強い怒りを表していたっていうのを記憶しております。これ最後にいただいた本ですけどね、この中でも書いてあるんですけどね自分たちの側から沖縄は基地のために土地や海を差し出したことは一度もないんだっていってましたですね。沖縄在住の作家の溝沼さんが知事の直接の死因は病であるけれども、ここまでに至った心労の深さは思うと、追い詰めた政権の側っていう強硬姿勢にその原因があるんじゃないかって趣旨のこと言ってました。私も同感ですね。」

この特集に当てられた時間は 1179 秒で、県知事選挙の構図が不明確ということもあり、今回は放送法第四条の観点からは特に問題とされる箇所は見られなかった。

・【特集】サハリンの語り部を目指して：結論→特に問題なし

俳優の小木戸利光（37）さんが中国残留孤児の人生を描いた「大地の子」というドラマを見たことをきっかけにサハリンの語り部を目指し、サハリン残留日本人への、次世代の語り部の研修へ参加する様子が VTR で取り上げられていた。サハリンについて「あまり知られていないがサハリンでは終戦の日の 8 月 15 日以降も地上戦がおよそ 1 週間続き、多くの市民が戦闘に巻き込まれた」ともナレーションで説明がされていた。

また、スタジオでは以下に朱記したやり取りが繰り広げられていた。

膳場「取材にあたった金氏ディレクターです。そもそも金氏さんサハリンの語り部にどうして注目して取材を始めようと思ったんですか？」

金氏ディレクター「私は 1991 年前後にサハリンで記者として駐在していたことがあるんですけども、ちょうどその頃がですね民間に援助でサハリン在留日本人の一時帰国が始まった時でした。取材先で人知らず、人知れず暮らしていた日本人の方が新たに見つかったりですね、ようやくその存在が世に知られ始めた時だったんですね。で当時を知ってた人たち残念ながらほとんど亡くなってしまったんですけどもたまたま小木戸さんと出会って、それで戦争を知らない人が、語り部になることはどんなことだろうと興味をもって取材を始めました。

日下部「そもそもこういった歴史の記録っていうのは国がやるべきことですよね。それを民間のしかも若い人が何とかつなごうとしているわけですよね。」

金氏「あの小木戸さんは俳優として長崎の原爆をテーマにしたドラマに出たりですね。もともと戦争や歴史のことについて興味を持っていたんですね。それがサハリンの日本人のことを知るうちに戦後祖国に見捨てられながら必死で生きてきた人たちの物語、こんなにいっぱいあるのになんでこんなに知られてないんだろうと感じて、それで自分がサハリンの語り部になろうと思い立ったそうです。」

金平「なるほど小木戸さんのような次世代の語り手に対する期待っていうのはやっぱり大きいですね。」

金氏「次世代の語り部をどう育てていくのかっていうのは、それから活躍の場をどうやって造ってあげたらいいのかっていうのは手探りの状態で小木戸さんのサハリン行きも自前でしたし、築地本願寺で語り部デビューするのも企画書を自分で書いて自分で歩き回ってようやく手にしたチャンス何ですね。こうやってハードルはいろいろあります。ただ小木戸さんはじめこのこんなに熱意にあふれた人たちがけっこういるっていうのは明るい材料だと思います。」

この特集に当てられた時間は 1606 秒で放送法第四条の観点からは特に問題は見られなかった。

最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨
特になし

検証者所感

・オープニング

金平氏の「自らに批判的なメディアに向かってフェイクニュースなどと執拗に言って攻撃するトランプ大統領に対してアメリカの 350 をこす新聞が報道の自由を訴える社説を一斉に掲げました。このニュース私達の国にとって果たしてよそ事でしょうか。」というコメントを聞いていたが 350 をこす新聞というアメリカの報道業界の裾野の広さに圧倒された。やはり系列化が進み、テレビは放送法によって政治的公平性などを求められる一方で許認可事業であることで新規参入とそれに伴う競争から守られ、新聞は日刊新聞紙の発行を目的とする株式会社の株式の譲渡の制限等に関する法律（略称、日刊新聞法）によって株式市場を通じたガバナンスから守られ、記者は記者クラブ制度によって新規参入とそれに伴う競争から守られる、という具合に数々の規制や慣行によってメディア業界が守られていて、またクロスオーナーシップによる新聞社とテレビ局の結び付きの強い日本に住んでいると、アメリカの風景はどうしてもよそ事に見えてしまう。

そうした非常に強固な規制に守られ放送事業やジャーナリズム業への新規参入の自由が実質的に行使しにくい社会に自分たちがいて、そうした環境下において自分たちが報道の自由および電波利用の権利を特権的に享受しているということに対する金平キャスターの高度な自己批判としての冒頭のコメントだったのかもしれないとも感じた。

・【特集】翁長氏死去で前倒し沖縄県知事選挙の行方

報道特集では沖縄と基地の問題が取り上げられる事が多い一方で他の地域にある在日米軍基地についてはあまり取り上げられることが少ないような気がずる。

・【特集】サハリンの語り部を目指して

VTR 中では「あまり知られていないがサハリンでは終戦の日の 8 月 15 日以降も地上戦がおよそ 1 週間続き、多くの市民が戦闘に巻き込まれた」という説明があったが、そもそも 8 月 15 日以降も戦闘が続いていたということがあまり知られていない大きな原因として、日本では 8 月 15 日が終戦記念日となっており、様々な式典が執り行われることが挙げられるだろう。こうした中でスタジオでの日下部キャスターが主張するような「そもそもこういった歴史の記録っていうのは国がやるべきことですよね。それを民間のしかも若い人が何とかつなごうとしているわけですよね。」という、「歴史の記録を国がやるべき」だとすれば、現状の 8 月 15 日が終戦の日だとする建前と、サハリンの歴史というのが真っ向から食い違ってしまうことは火を見るより明らかである。

歴史の記録を国がやる、ということは逆に言うと歴史的事実について記録される物されない物、また記録されるものの中でも厚みを持って記述されるものとそうでないものなどの選別も国によって行われるということであるだろう。また、国が歴史の記録を行うということは「公定の歴史観」を生み出し、これが教育の場に持ち込まれた場合は「歴史観」の押し付けということになるのだが、そうした点まで考えての発言だったのかはいささか疑問であった。